

檀原市立図書館だより

平成22年12月1日発行
第21号

檀の樹

檀原おはなしの会
2、3

秋から冬へ
4、5

図書館員の本棚
6、7

全国図書館大会
8



檀原おはなしの会



当市の行事で「読み聞かせ」をおこなう檀原おはなしの会のメンバー。習熟の語りが、聞き手を物語の世界にいざないます。

檀原おはなしの会が結成10年を迎えました。毎月第2、第4土曜日の図書館での「おはなし会」や、市内小学校・幼稚園へのおはなしの配達など、あるいは地域の催事での連携などで、現在38名の会員が活動しています。結成時からメンバーである岡林巧子さんと増野美岐子さんにもお話をうかがいました。

ブック・スタート発祥の地である英国では、読書会も盛んにおこなわれています。新聞報道(*1)によると、リヴァプール大学のひとりの講師が地域に出て9年前に実験的に始めた読書会が、「療法」としての側面で着目されつつあるといいます。読書を、趣味や娯楽の対象としてのみ捉えるのではなく、ひとがより良く生きるために身につけた方が望ましい方策のひとつとして、積極的に意義付けようとする動きです。

「読書療法」とはといっても、自己療法や自己治癒についての医療的な本を読むわけではありません。シェークスピアやディケンズなどといった英国人にとって身近な古典的名著を、時間をかけてじっくりとグループ全員で読み進んでゆきます。ひとりでは完読することが難しい大部の本を、記述されている内容についてメンバー間で慎重に話し合い、時には議論し合います。共同作業としての読書と、それに伴うメンバー間の対話にこそ、この試みのポイントがあります。

テキストを介して行われる探究が、期せずして自己を認識することにつながってゆきます。生い立ちや経験、あるいは疾患程度の違うメンバーは、互いに「他者」であることを鮮明に意識させられます。そして他者の視点を自己の中に獲得することによって、閉じられた狭い世界観を抜け出し、自己を客観化できる強さとバランスを身につけてゆきます。

*

檀原おはなしの会では、「読み聞かせ」や「ストーリーテリング」といった本と読書を介した活動を通じて、地域の読書の輪が広がってゆくことにも取り組んでいます。

檀原おはなしの会、右記記事に関するお問い合わせ先
檀原おはなしの会代表 増野 美岐子さん
電話 0744-27-6269

(*1) 平成22年9月20日 朝日新聞グローブ「ロンドンの書店から」

土曜日のおはなし会



毎月第2、第4土曜日午後3時から、館内1Fおはなし室で、檀原おはなしの会が絵本の読み聞かせを行っています。(第1、第3土曜日は図書館員と図書館ボランティアが担当)参加自由。詳細は図書館カウンターにお問い合わせください。

「冬の特別おはなし会」

ストーリーテラー芦田悦子氏による子ども向けの「おはなし会」を行います。

平成23年1月29日(土) 午前11時～正午
檀原市立図書館1F おはなし室
対象 子どものみ 4歳～小学2年生
定員20名 申込は不要です。

「ブックトークを楽しもう」

鈴木晴代氏による、子どもを対象としたブックトークを行います。

平成23年3月12日(土) 午後1時～
檀原市立図書館1F おはなし室
対象 子どものみ(小学2、3年生)。詳細は後日「広報かしはら」「館内チラシ」で。

—— 活動のきっかけを教えてください。

岡林 定年退職までの最後の4年間を、檀原市の夜間中学の教諭として過ごしました。様々な事情を抱えながら懸命に読み書きを習得しようとしている生徒さん達と接しているうちに、私自身が、言葉や学びの問題に直面せざるを得ませんでした。退職後、「相談電話」でボランティア活動をしている時に、檀原市立図書館主催の「ストーリーテリング養成講座」を受講しました。せっかく講習を受けて、本やひととの有意義な出会いもあったのに、講習終了と同時に「はい、おしまい」では残念過ぎると思ったのです。最年長者として他の受講生の方に声をかけさせてもらったら、皆さん賛同してくださって……。

—— それが「檀原おはなしの会」結成の契機となったわけですね。

増野 私の場合は、おはなしの会の結成以前から、檀原文庫連絡会で文庫活動を継続していました。ステリ講座で岡林さんとの出会いがきっかけです。

—— おふたりとも、発足時からのメンバーですね。現在のおはなしの会のメンバーの中には、増野さんと同様に文庫連絡会の会員の方も多くおられます。

増野 私自身が「本好き」ということが先ずあって、児童書でも絵本でも、私自身が真っ先に楽しんでいます。その上で、かつてはこどもだったひとりのおとなとして、本と物語の有意義な世界をこどもたちと共有できたら素晴らしいと思っています。

—— 以前、増野さんと話していて印象深かったのは、「会の性質上、ストーリーテリングを希望するメンバーが多いのだが、図書館のおはなし室での活動では、受け手である子どもたちに様々な世界と出会ってもらいたくて、オーソドックスな優良絵本の朗読等も積極的に取り入れながら、内容に偏りが生じないように留意している」とおっしゃっていました。おふたりとは別のメンバーの方ですが、「この会(おはなしの会)の素晴らしい点のひとつは、退会者がほとんどないことだ」という意見もありました。

岡林 この会は、メンバー同士の仲がとていいのですよ。役員改選の時も、どんな役割の時であっても、皆さん率先して積極的に引き受けてくださいます。本当に、揉めた記憶がないのです。

—— 自主活動としての皆さん方の独立性や自律性を損なうことなく、どのような形で図書館と連携していただければ「こどもたちの利益」に適うのか、今後も共に模索いただければ幸いです。

檀原おはなしの会 今日までの歩み（抜粋）

平成12年9月	檀原おはなしの会結成	平成17年7月 8日 9月16日	わらべ唄・手遊び・小物講習会 (講師 山本 淳子氏)
11月28日	最初のお話配達(畝傍北幼稚園)	11月9日	ブックトーク講習会(講師 鈴木 晴代氏)
平成13年8~11月	第1回まほろばおはなし交流会(香芝・たかた・檀原)	平成18年11月11日	山形の語りを聞く会(講師 井上 幸弘氏)
平成14年4月13日	「おはなしのとびら」開始。(図書館おはなし室にて、月1回実施 第2土曜日)	平成19年7月	檀原市子ども読書活動推進計画ワーキンググループに参加。
平成15年8月	会報「緑のたね」第1号発行	平成20年6月5日・12日	絵本講座(講師 加藤 啓子氏)
10月	最初の小学校へのお話配達(金橋小学校)	平成21年9月23日	親子でおはなし会(講師 大野 由美氏)
平成16年4月	会則制定。また、「おはなしのとびら」を「図書館おはなし会」に名称変更。併せて月1回から月2回実施(偶数土曜日)に変更。現在に到る。	平成22年1月14日	檀原高市国語教育研究会でのおはなし会実演。
		平成22年10月7日	10周年記念おはなし会(交流会) 大野 由美氏、近隣のおはなし会等が参加。

秋から冬へ

「秋の読書週間」に合わせて、図書館フェスティバルとして下記の関連催しを開催しました。また、クリスマスや冬休みを控えての「お知らせ」も掲載しています。

◆ストーリーテリング講習会

講師 榎原おはなしの会（勝井 立子 氏 高俣 明美 氏）

- 10月28日(木) ①おはなし(ストーリーテリング)って何？
- 11月 4日(木) ②おはなしを選ぶ(どんなおはなしがいいの?)
- 11月11日(木) ③おぼえる(楽しくおぼえるには?)
- 11月25日(木) ④おはなしの実際(さあ、やってみよう!)
- 12月 2日(木) ⑤おはなしの発表



ストーリーテリングとは、物語をおぼえて子どもたち(あるいは大人たち)に語ることです。子どもたちは物語の楽しさを知ること、図書に興味を持ち始めます。

グループに分かれての対話形式も取り入れながら、上記の5回のプログラムをおこないました。

◆第29回 文庫まつり

秋の読書週間にふさわしいプログラムを実施しました。



- ◇11月7日(日)
- ◇かしはら万葉ホール
4F研修室

ゆかいな「くまダンス」に始まり、榎原市に伝承する昔話を再話した紙芝居などの上演、詩「のはら歌」から起こした人形劇「のはら村のみんな」ブラックライトパネルシアターなどのプログラムが、榎原文庫連絡会メンバーによっておこなわれました。

◆特別貸出

秋の読書週間にあわせて、10月23日(土)から11月7日(日)まで、図書の特別貸出をおこないました。

- ◇貸出冊数
- 図書・雑誌についてひとり10冊まで
(通常は5冊)

◆広陵町立図書館長 出張講座 「榎原の大地のつくり」



大阪教育大学名誉教授で広陵町立図書館長の菅野耕三さんを迎え、地球誕生から人類に至る「生命」の流れや、榎原地域の地殻構造等について、館長「お宝」の化石標本(実物)の展示やスライドも交えて語っていただきました。「液体よりも固体の時の方が軽い水は、表層が凍っても内部は液体の状態が維持されやすい。そのため、海全体が凍りつくことが回避され、古代生物が命をつなぐことができた要因のひとつとなった……」 畝傍山、耳成山がかつて海底火山であったことなどにもふれられた。

- ◇ 11月6日(土)
- ◇ かしはら万葉ホール4F 視聴覚室

◆図書館ボランティアの会

「おとなも楽しむおはなし会」

図書館員とボランティアが、絵本の読み聞かせに併せて図書の紹介もおこないました。



- ◇10月30日(土)
- ◇館内1Fおはなし室
- 1部 午前11:00~
- 3部 午後 3:00

◆鈴木純子パネルトーク展

—図書館フェスティバル企画—

◇日時 平成22年10月10日(日)
◇講師 絵本作家 鈴木 純子
(すずき じゅんこ)

「カブーのちいさなあおいほし」などの著作をお持ちの鈴木純子先生をお迎えし、絵本づくりの重要な要素である絵画について、展示した原画を前に作者自身による解説がおこなわれました。



◆ふれあいいきいき祭り—
大型絵本の読み聞かせ

◇平成22年10月24日(日)

かしはら万葉ホール2Fに仮設された「わくわく！遊びのフロア」に集まった幼児の皆さんに、「はじめてのおるすばん」などの読み聞かせを図書館員とボランティアがおこないました。

◆—かしはら探検隊出展—

青空紙芝居



◇平成22年10月23日(土)

当日は天候にも恵まれ、秋の空気が澄みわたる香具運動公園内の仮設会場で、けん玉、バルーンアート、ダーツなどのコーナーとともに、「だんごむし」「わらしべ長者」「どうぞのいす」などの名作紙芝居を図書館員が実演しました。

冬のお知らせ

◆図書館の“どんぐり”展

今回は資料展示(所蔵図書の展示)、作品展示(工作等の関連展示)ともに共通タイトル「図書館の“どんぐり”展」です。

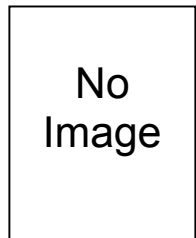
資料展示 作品展示 共催企画「図書館の“どんぐり”展」
期 間 場 所 12月1日(水)～1月30日(日)
2F 展示コーナー

山林の中で食物連鎖の底辺を形成している“どんぐり”は、子どもたちの良き遊び相手にもなってきました。そのため、絵本や児童文学にもしばしば登場します。冬休みの工作や自由観察のヒントとしてもご覧いただけるように、所蔵図書と関連資料による共催展示をおこないます。



◆資料展示「坂の上の雲の世界」

展示中です



「写説『坂の上の雲』」
谷沢永一他 ビジネス社

貴重な記録写真と文献資料によるもうひとつの「坂の上の雲」です。
2F展示コーナー 26日(日)まで

◆12月の休館日

6日(月)、13日(月)、20日(火)、
27日(月)～31日(大晦)

◆年末年始のお知らせ

12月27日(月)から23年1月4日(火)まで休館します。新年は1月5日(水)から開館します。

◆クリスマスおはなし会

12月18日(土)
15:00～15:30



1F おはなし室

大型絵本「ぐりとぐらのおきやくさま」などの読み聞かせをおこないます。

◆特別貸出

12月7日(火)～26日(日)の期間中、図書の特別貸出を行います。

冊数、図書、雑誌について10冊まで(通常5冊)

貸出期間 4週間(通常2週間)
※視聴覚資料については、ひとり2点まで、4週間。

図書館員の本棚(α)

加古 里子 さん その他

この春、私は市役所を退職して第2の人生をスタートしました。その新たらしい一歩を踏み出す契機を与えてくれたのが、絵本との出会いでした。5年前、図書館に配属になり、子どもの読書活動に携わることになりました。児童サービスを担当するためにも、絵本や児童文学の知識が必要になりました。行政職であった私は司書資格を持たなかったこともあり、自身でそれをも身につける必要に迫られました。

はじめは義務感から始めた独学でしたが、ふと気がつくと、絵本の素晴らしさに深く魅了されている自分がいました。絵本は子どもたちの大きな楽しみ……、それは言うまでもないことなのですが、しかしそれだけにとどまらず、絵本とは何と素晴らしく、奥深いものなのだろう……。義務感からくる息苦しさからはすっかり開放されて、すがすがしい気持ちで絵本の世界を楽しんでいる自分がいました。

『絵本の読み聞かせは、「いのち」をいとおしむ感性を耕し、おとなの渴いたところも潤す。変わるべきはおとなのまなざしだろう』（柳田邦男著「みんな絵本から」）子どもが将来つらいことや困難に直面した時には、それを乗り越える強くしなやかな心が必要です。それは、大きな愛情に包まれながら感性を磨いてゆくことで育まれるのではないのでしょうか。絵本の読み聞かせの効用の秘密が、ここに在るような気がします。

絵本には、子どもだけでなくおとなさえも惹きつける力があります。どの絵本がそうなのかはひとりひとり違って、そのひとにとっての大切な一冊が必ず見つかるはず。もし、子どもの読書に関わるおとなが、こころの友となる一冊と出会うための案内人となることができればどんなに素晴らしいことでしょう。

おはなし室でいつも感じることは、「もし、今日の前にいる子どもたちがおとなになった時、このうちのただひとりでもいいから、このひとときの時間が思い出となってこころの奥底の引き出しに仕舞われてくれたら」ということです。これからは、私自身が心豊かなおとなになるための生涯学習として、本と子どもたちつなぐ架け橋となれるような活動をしてゆきたいと思います。

(檀原市図書館ボランティアの会会員 西村 洋子)

「だるまちゃん」と「てんぐちゃん」だるまちゃんのはてんぐちゃんの持っているものが欲しくて、お父さんのたるまどんにねだりますが……。それぞれの表情がとてもユーモラスな、クイズ仕立ての物語です。加古さんには、この「だるまちゃんシリーズ」の他にも、科学絵本や知識絵本があります。「かわ」は、素朴な筆致の絵のなかに、ひとびとの暮らしが細々と描かれています。各ページの絵を横繋ぎにすると、源流から河口までの1本の川筋の変化を描いた大きな絵になります。「かわ」もまた、「海」「地球」「宇宙」「人間」の4冊とともにシリーズとなっています。

加古 里子(かこ さとし)
(1926~)
作家。東京大学工学部応用科学科卒。化学会社研究職、東京大学、横浜国立大学等講師。
「うつくしいえ」「からすのパンやさん」等著作多数。

No
Image

「みんな、絵本から」
柳田 邦男 著

講談社

No
Image

「だるまちゃん」と「てんぐちゃん」
加古 里子 著

福音館書店

No
Image

「かわ」
加古 里子 著
福音館書店

図書館員の本棚⁽¹¹⁾

「これからの正義の話をしよう」 早川書房
 マイケル・サンデル 著

マイケル・サンデル
 (1953～)

現在米ハーバード大学法
 学部教授。オックスフォ
 ード大にて博士号取得。専門
 は政治哲学。

法という言葉から私たちが連想するのは、社会的存在である私たちの存在や行為を規定し、時には権利義務の関係を発生させ、場合によっては刑罰を科すことさえ可能な数々の実定法のことではないでしょうか。そうしたルールとしての法とは別に、そもそも法にはどういった意義や効用が存在するのか？ 法を制定し運用するために、どういったことに留意すればよいのか？ といった根源的な問題について、これまでの歴史的経緯や諸説も踏まえながら深く広く考察しよう……というのが、「法哲学」「政治哲学」なのでしょう。

マイケル・サンデルさんは、米国ハーバード大学で政治哲学の講座を担当している教授です。講座の名称は、ずばり「justice」。同大学でもっとも人気のある講座とされ、建学以来、はじめて大学側が特別に広く社会に公開するに至りました。日本でも、この夏に NHK 教育テレビによって「ハーバード白熱講義」として放送されています。本書は講義内容の要点をまとめたものです。

本書の大きな特徴のひとつは、法学部の教科書によくある学説を羅列した概説書ではない点です。アリストテレスに始まり、カントやヘーゲルらを経てロールズ、ドゥウキンらに至る思想史の系譜を、現代人であるわたしたちが様々な思いを込めて使用する「正義」をキーワードに、時に卑近なほど具体的に解き明かしてくれる点です。

「アメリカで一番のお金持ちは？」教授が大教室の学生たちに問いかけます。

「ビル・ゲイツ？」

「そのとおり。どれくらいの年収か解かるひとは？」

いかにもアメリカの教授らしく、フランクに講義が始まります。「約4百億ドル。一方、州政府の公立小学校教諭の平均的な年収は約4万ドル。ビルが破格なまでに高額な収入を享受することは、社会的に容認されるのか？」

こんな調子で、話題は所得の再分配や自由と平等の概念に移行してゆきます。様々な立場や価値観が鋭くせめぎ合う多民族国家アメリカの厳しい洗練によって磨かれてきた格差原理や機会均等論が展開されます。個人の収入という生々しい話題から論を起こして、高度な価値判断についての法的、政治的問題点を提起してきます。「制御不能となった車に5人が乗っている。暴走を止めるには、そのうちのひとりが下敷きになるしかない。ひとりが犠牲となって4人が助かるか？ それとも5人が平等に命を落とすべきか？」

最大多数の最大幸福論が下敷きになっているのはいうまでもありません。学生の大勢も、ひとりの犠牲はやむを得ないというものです。

「では、論点を変えよう。橋の上に偶然居合わせている別のひとりを突き落とせば、車中の5人は救出できる。このひとりをやはり同様に犠牲にしてもよいか？」

この設問に、学生と読者の多数が立ち止まってしまうのではないのでしょうか？ 数値化によって、価値判断をより合理的に実現できるとしがちな功利主義や市場主義の盲点を、あえて極論を用いることで鮮明に浮かび上がらせています。

21世紀に入って、世界ではひとびとに苦痛を与える様々な紛争が「正義」の名においておこなわれてきました。身近なことに限っても、成果主義や陪審員制の導入など、ひとりひとりが厳しく価値判断を求められる場面が増えています。ハウツー本やマニュアルには記されることのない「正義」の問題について、様々な示唆に富む一冊ではないのでしょうか。

No
Image

「これからの正義の話をしよう」
 マイケル・サンデル
 早川書房

No
Image

「ハーバード白熱教室講義録(上)(下)」
 マイケル・サンデル
 早川書房

No
Image

「ロールズ 正義論とその批判者たち」
 チャンドラン・クカサス
 勁草書房

橿原市立図書館

〒634-0075
橿原市小房町11-5

TEL:
0744-29-2121

FAX:
0744-21-1011

http:
[//www.ksh-lib.jp/](http://www.ksh-lib.jp/)

編集後記

白夜を旅したひと

「私小説」と呼ばれる作品を紡ぎ出し続けた作家たちがいた。自身の経験を題材にして、その苦しみや悲しみの切実さをもって作品を成立させたひとびとである。徳田秋声、正宗白鳥らを経て尾崎一雄や上林暁などに至る系譜の中で、最後の光芒を放った作家が三浦哲郎さんだった。

昭和6年に八戸で生誕した三浦さんは、6人きょうだいの末弟だった。そのうちの2人が色素欠乏症(アルビノ)としてこの世に生を受けた。戦前、偏見が根強かった地方都市で、運命は一家に重くのしかかった。重圧に耐えきれず、兄弟のうちのふたりが失踪し、他のふたりが自ら命を絶った。

青年時代の三浦さんは、血統と自滅の恐怖に慄き続けた。こうした過酷さに見舞われた時、ひとはどんな風に対処すればよいのだろうか。迷い悩んだ果てに、三浦さんは文学を志した。作家になるより他に、生きるすべを見つけれなかったのかもしれない。

「短編の名手」として著名だった三浦さんも、幾つかの長編を残している。そのひとつが、一族に関わる事情を描いた「白夜を旅する人々」である。登場人物のひとりに、こんな風に語らせている。「暮れるでもなく、暮れぬでもなく、眠れぬままに寝返りを重ねるばかりの白い夜……」それは、作家自身の内部の風景でもあったに違いない。

運命を静かに受け入れて生きた次姉を、三浦さんはこの3月に失った。倒れた時、春まだ浅い北国の独居の台所には、洗い終えた米が炊飯器に準備されていたという。最期まで前向きであった姉のそうした姿を作品にと願っていた。(8月29日逝去 76歳)

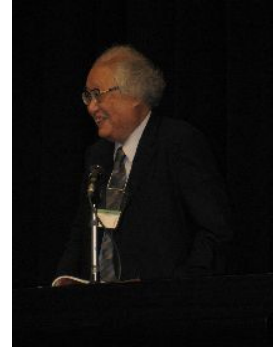
全国図書館大会奈良大会 第4分科会 児童・青少年サービス 9月17日(奈良女子大学)

毎年各都道府県を巡回する当大会が、今年は奈良県で開催されました。

初日16日、東京外国語大学教授でロシア文学者の亀山郁夫氏による基調講演を受けて、2日目は16の分科会に分かれパネルディスカッションや事例報告などが行われました。第4分科会「児童・青少年サービス」は、奈良女子大学講堂が会場になりました。

17日に開催された図書館情報大学名誉教授の竹内哲先生による基調講演のヒトコマ。(右写真)

「読書の経験を積み重ねてゆくと、子どもたちは様々な恵みを受ける。そのひとつは、困難や挫折に見舞われた時、それを乗り越えるすべが分かることである……」



図書館、文教、民間団体の代表による議論がおこなわれました。



奈良県における児童サービスと地域文庫等の経緯について発表する天理市立図書館の高橋樹一郎次長。自治体立図書館が整備される以前の県内の読書事情について、文庫が果たした社会的役割等を解説。

奈良県図書館協会・公共図書館部会ポスター展

上記の図書館大会奈良大会に連携して、奈良県立図書館情報館を含む県内4会場で実施しました。県内公立図書館の利用促進を図るため、主要図書館による共催企画です。

10月1日～6日、南部会場であるイオンモール橿原アールでも当館作品を含む諸作品を展示しました。



表紙の写真

クリスマスや年末年始を控えて、図書館の資料展示も冬の内容になります。ぬいぐるみのサンタクロースを抱きながら、“おばあちゃん”の読みかきせに耳を傾ける女の子。季節の絵本を多数配架してお待ちしています。